令和５年度（2023年度）第２回地域クラブ活動推進協議会議事録

１　日時：令和６年２月９日（金）　10時45分～12時00分
２　場所：Zoomによる遠隔会議（かでる２・７　310会議室から配信）
３　説明：部活動改革推進課　高橋課長補佐から資料に沿って説明
・　部活動の地域移行に係る市町村の取組状況調査結果概要
４　事例発表
(1)　蘭越町の取組について：蘭越町教育委員会　梅本教育次長から事例発表
・令和３年度から部活動指導員を配置し、令和４年度からは中学校に設置する７つの部活動全てに配置。
・令和５年度国の実証事業を受け、札幌大谷大学と連携し、吹奏楽のリモート指導を実施。
・リモートで３回、対面で１回指導を行った。
・吹奏楽経験のある地域住民３名と吹奏楽部の部員をメンバーとする「地域吹奏楽クラブ」を設立。
・平日は部活動として、休日は「地域吹奏楽倶楽部」で活動。
・地域移行後の事務局をどのような形とするかが課題。

(2)　中札内村の取組について：中札内村教育委員会　高橋コーディネーターから事例発表
・休日と平日を一体として取組を進め、総合型地域スポーツクラブ「中札内ピータンスポーツクラブ」との一体化を目指す。
・地域の愛好者を指導者として育成し、少年団を含めた9年制、南十勝地区も含めた近隣町村との連携を目指す。
・推進協議会は、中学校の保護者など若い年代もメンバーとしている。
・小学４年生～中学３年生とその保護者・教員を対象にアンケート調査。
・「基本的な身体の使い方等を学びたい」という中学生のアンケート結果を基に「からだ塾」を開催。
・令和６年度、「指導者講習会」、「集団スポーツにおける基盤整備」、「文化部活動の支援体制整備」等に取り組む。
・持続可能な取組とするために、指導者の確保も含めた基盤整備を進めていく。

５　意見交換内容　　〇構成員　●事務局

蘭越町の取組について	
〇座長（志手教授）	これまでスポーツ関係での取組が多かったところですが、蘭越町から吹奏楽の取組について事例発表いただいた。大学と連携し、ＩＣＴを活用したリモート指導に取り組んだということで新しい取組と感じる。
〇道文団協（伊藤事務局長）	大学と連携し、リモートでのレッスンを活用した事例で、大変素晴らしいと感じた。指導者の確保が一番の課題となっているが、ＩＣＴを活用することで、文化関係の指導の可能性が広がるのではないかと感じた。音大や美大との連携のほかにも、一般の指導者についてもダンスや演劇、料理、囲碁、将棋などさまざまな種目で可能性が出てくるのではないか。
〇石狩中文連（水崎校長）	大変素晴らしい取組だ。石狩管内の文化部の部活動では、例えば合唱では千歳市の学校が３校合同で音楽発表会に出場しているという状況がある。江別市では市内のすべての学校に吹奏楽部（内１校はマンドリン部）があり、地域移行について顧問教員や保護者が議論する場では、「活動を継続させてあげたい」、「拠点校方式にした場合の移動手段はどうするか」、「指導者をどう確保するか」、「事故等が起きた場合の対応はどうするか」といった議論がなされていたと報告を受けている。いずれにしても工夫をしながら子どものために取組を進めることが大切だと思う。
〇座長（志手教授）	移動の問題等に対応してリモートに取り組むと、ＩＣＴに長けた人材が必要になるなど難しい面もあると感じた。
中札内村の取組について	

○道スポ協（酒井事務局長）	中札内村の事例発表について大変素晴らしい取組と感じている。北海道スポーツ協会としては、地域のスポーツ環境をどう維持して行くのかということが大きな課題となっている。中札内村の取組では、「部活動の地域移行は、部活動を地域との連携・協働によって持続可能な活動としていくこと」と村民の皆様にご説明した上で、意見を聞きながら進めているという点に感銘を受けた。その中でも、子ども達のための取組であるという視点が重要で、子ども達の意見もアンケート等で把握し、それを反映した形で事業を進めていくというのは非常に良い取組だと感じた。 地域でどう受け皿を形作っていくのかというところが重要で、中札内村は、地域でしっかりと話し合って進めていくというスタイルであるところに感銘を受けた。 中札内村の規模を生かした取組という面もあるとは思うが、他の町村でもこうした形で、取組が進むことを望む。
○中体連（吉本校長）	中札内村の事例発表を伺い大変勉強になった。平日と休日を一体とした取組や地域をまたいだ取組を視野に入れている点、ねらいをもって検討組織を形成している点、見通しを明らかにしながら取組を進めている点など、持続可能な仕組みづくりにつながる。 部活動の地域移行を進めていく中核は、各自治体や各競技団体であると思うが、持続可能な取組にしていくという視点に立ったとき、地域の方々が子ども達のスポーツ・文化芸術活動を地域全体で支えていくという世論形成が重要になってくる。この点、中札内村では「協働」という言葉を大切に取り組まれているのが素晴らしい。
国の委託事業を活用した部活動の地域移行の取組を進める上での留意点（道教委の取組）について	
○総合型地域SC連絡協議会（井上理事長）	部活動の地域移行については、かなり進んできている市町村も、まだこれからという市町村もある状況。「部活動の在り方検討支援アドバイザー」として、いくつか市町村を回らせていただいたが、アドバイザーとしてお話を伺う中で、改革の着地点がイメージできていないところでは、どうしても「手法をどうするか」ということや目の前の課題の解決のみに力が入ってしまい、子ども達のための改革であるという焦点からずれてしまうというところがあるのではないかと感じた。 部活動の地域移行は大改革で、現場の混乱も伴うものであるので、学校だけ、地域だけが考えるというものではなく、地域全体が協働した中で、どうしたら子ども達のために、大人の力を合わせられるのかという視点から考えていく必要があると思っている。 北海道には小規模な自治体が多く、広域連携を検討していく必要があり、そうしたときに教育局の働きが重要になってくると考えている。 また、事務局から説明のあった長崎県長与町の取組では、教育委員会、学校、保護者、受け皿となる総合型地域スポーツクラブの役割分担が明確化されている中で、コーディネーターが機能している。こうしたことから持続可能な取組になっていると思う。 蘭越町・中札内村の取組はどちらも素晴らしい事例で感動している。
●事務局（高橋課長補佐）	道教委では昨年４月に、道内14の各教育局に「部活動の地域移行に関する地方本部（サポートチーム）」を設置し、各教育局では、管内の市町村教育委員会の担当者を対象に会議や意見交換などを行っております。そうした中で、各教育局から指導・助言等を行っており、今後、より教育局の働きが見えるように、活動を促していきます。
国の委託事業を活用した部活動の地域移行の取組を進める上での留意点（市町村の取組）について	
○小学校長会（丹野校長）	蘭越町・中札内村の取組は、学校、地域が一体となった取組で大変参考になった。 各自治体の取組を見ていると、道内では比較的小中規模の自治体の事例が多く、10万人から15万人規模の自治体が取り組む際にはこれらの事例がうまくマッチしないのではないかと感じている。中規模以上の自治体での先進事例がもっと出てくると取組がさらに進むと感じる。 苫小牧市でも、地域クラブの推進という形で取組が少しずつ進んでいるところではあるが、同じような規模の市での先進事例があると、取組を進めていく市が増えてくると思う。

○座長（志手教授）	前回の会議で事例発表いただいた安平町を含め、比較的小規模の自治体の取組事例が多い印象だが、道教委として中核都市の取組等についてはいかがか。
●事務局（高橋課長補佐）	自治体の規模に応じた事例については、伊達市や留萌市などでの取組もあり、市町村に提供していきたい。 また、国のホームページにも全国の先進事例が掲載されており、こちらもご参考にして頂ければと思います。
○道Ｐ連（若林副会長）	中札内村の「愛好者から指導者へ」という取組が大変素晴らしい。私自身、子どものころから長年アイスホッケーをプレーしてきて、子ども達にも教えたいと思っている。 保護者が地域の指導者として関わろうとするとき、仕事もあるため遅い時間帯になりがちで、中学生の生活サイクル、家庭での学習時間とのバランスをどうするのかというところを心配している。指導者が勤める地元企業の理解を得ていくことも大切と考える。 また、小学生の野球少年団なども少子化で人数が減ってきているのだが、すぐ隣のチームとではなく、選手が足りないチーム同士で合同チームを組むために、練習場所が遠くになってしまうということが起こっている。また、学校ごとのチームではないために、チーム間で選手を取った取られたというトラブルも起こっていると聞いている。こういったこともあるので、中規模以上の自治体での地域移行の際の課題やその解決策について、横のつながりで情報共有できるようにしていただきたい。
●事務局（高橋課長補佐）	他県等でも同様の課題があるのかについて情報収集したい。飛び地での合同チームでの取組となると、練習場所への移動手段をどうするかといった課題も出てくるかと思う。今後、情報収集した上で、同様の課題を抱える自治体に情報提供できればと思う。
○道教委（田口課長）	お話をいただいたような個別の課題、個別の事例というのは各市町村によって様々なものがあるのだと思う。規模に応じた事例が必要という話もあったが、うまく行った事例だけではなく、課題があったものにどのようにアプローチした結果うまく行ったというような具体的な部分についても情報提供できるような形を考えていきたい。
○中体連（吉本校長）	先ほど小学生のチームで、選手を取った取られたというトラブルがあったというお話があったが、中学生のバスケットボールのチームでも同様の事例があり、大きな課題だと捉えている。 地域クラブを推進していく目的は、子どもたちのスポーツ・文化芸術活動を持続的なものにしていくことにあり、選抜チームを作って優勝チームを作ることは目的にはない。誤解している地域のクラブもあるかもしれないことを踏まえ、各市町村教育委員会と連携し、中体連大会に出場できる地域クラブ活動を整理し、大会運営を行っていきたいと考えている。
まとめ	
●事務局（高橋課長補佐）	貴重な御意見、御要望などをいただきありがとうございました。いただいた御意見などを踏まえ、国の実証事業をはじめとする部活動の地域移行の取組に関して、道教委として検討し、取組を進めてまいりますので御協力をお願いしたい。
○座長（志手教授）	中札内村の事例発表にもあった「持続可能」ということが鍵になる。国の委託事業終了後も、これまで学校の部活動が支えてきた子どもたちのスポーツ・文化芸術活動をどう地域に移行していくのか、「子ども達のための改革」という視点から、持続可能な活動にしていかなければならないと思います。